
推定妖精、白羽冬莉

雛月詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

推定妖精、白羽冬莉

【Nコード】

N0877E

【作者名】

雛月詩音

【あらすじ】

いやなことがあってひとりになった日、あたしのところに推定妖精な不思議ちゃん・白羽冬莉がやって来た。冬莉は妖精みたいなかわばわした笑顔で言う「わたしと一緒に、死んでくれない？」

ガトーショコラ、ロールケーキ、ブルーベリータルト。

昨日あたしがまとめて食べてやろうとしたケーキたちの名前だ。

ケーキ三つ、一気食い。三つ、一気だなんて……。考えただけでも
よだれが出る。おそろしい。

われながら、これはとんでもない暴挙だった。

なんでそんなことを、しようとしたかというと。

昨日学校であんまりいやなことがあったものだから（思い出した
くもない）、やけ食いでもしてやろうって思ったんだ。で、あたし
はなけなしの千円札握り締めてお菓子屋に行ったというわけなので
す。けどもね。

閉まってやがった。

定休日だとお！？とか叫んでシャッター蹴り飛ばしたのは言うま
でもない（うそだけど）。

ぶち切れたあたしは夕方五時から寝てやった。ふて寝だ。目が覚
めたら九時だった。夕ご飯はなくなってた。いやそれはいい、どう
せ食欲はなかったから……。

そんなことより夜眠れなくて死んだ。どんだけベッドの中でうだ
うだしたか分からない。寝付く頃にはもう外は明るくなってた。あ
たしの目には隈ができた。

もちろん一晩寝て起きたくらいで気が晴れたりしないので、学校
はサボってしまった。

しかもね。昨日から始まってるんですよ……。最悪だ。

昨日から今日にかけて満身創痍になったあたしは今、ここ　街
外れの丘にいる。

ここはあたしだけのひみつの場所。見晴らしがよくて、明るい陽
射しに照らされた街の風景が見渡せて、風が吹けば自然の花畑がさ
ざめいて、草の絨毯に寝っ転がるもよし、なんでか倒れてる木に腰

掛けてぼーっとしてもよし、とりあえず一人でいるには一番いい感じの場所だと思ってる。

なのに、今日のあたしはため息をついたりなんかして。

見上げる空は、青い。雲ひとつない。晴れている。いやになるくらい晴れた空。

ブルースカイ。

まじブルーだ。ブルーベリーよりもずっと、ずうっとブルーだ。

……はふう。あたしの心もブルースカイ。

あたしの足は勝手に一番奥、すなわち一番高い場所に向かった。ざざっと音を立てて、枝の隙間から漏れてくる陽の光が顔を撫でる。気持ちいい。でもそれくらいじゃあたしの心は晴れないのだった。

丘の上に立つと、あたしはいきなり下を見た。

けっこう急だ。落ちたら死にそうだ。

落ちたら痛いかなあ……とか物騒なこと考える。ありえんとか思ってる自分と、落ちたらどうなるだろうと考えてる自分とでなんだから頭の中が分裂してしまったみたいだった。

はふう、とまた一つため息をつく。ため息ついたのははどっちの自分だったやら。

いきなり、後ろから声がした。

「やっぱり、来てくれた」

あんまり驚いたから落っこちるところだった。あたしは首がねじれそうな勢いで振り向いた。

ふわふわのわたあめみたいな声には、聞き覚えがあった。

白羽冬莉。

推定妖精。

彼女はまったくいつものように、ふらふらとあたしのほうへやって来る。そしてあたしから約四歩、白羽冬莉基準で五歩の距離を置いて立ち止まると、ほんとうに妖精みたいなぽわわした笑顔でこう言った。

「ねえ、わたしと一緒に死んでくれない？」

あつたかな風が吹いて、すこしだけ、くすぐるようにあたしの頬を撫でていった。

さらりと……

花々がさざめいて、一瞬だけあたしに考える時間をくれた。そして初めに思ったことといえば、死ぬのはいやだとかなんでそんなこと言うんだとか、そんな実際的なことでは全然なくて、もつとふわふわとした　つまり、

推定妖精少女でも「死ぬ」なんて口にするのだな、ということだった。

白羽冬莉は十三歳で中学二年生、四月一日生まれ。すなわち学年で一番年下。だからなのか、いや関係ないと思うけど、ものすつごくちいさい。セーラー服ぶかぶか。髪の色がやたらと薄くて（しかもナチュラルらしい）、長さは腰とかゆうに越えるくらいすさまじく長い。それなのに不潔な感じはぜんぜんなくて、何かへん。いや、へんだというなら髪よりも彼女じたいがかなりへんだ。不思議ちゃんというのか。

だいたいいつも眠そうな顔をしていて、半分目を閉じていて、ものすごく遠くを見るような目をしていて……遠くというか、「ここではないどこか別の世界」に体の半分くらい奪われているような。左脳とか。右脳だっけ？

肌なんかも異常にきれいだ。白い、ひたすらに白い。触ったらきつと滑る。あるいは溶ける。あたしの指と彼女の肌が一緒になって溶けてしまう、つまりアイスクリーム？　雪見だいふくとか。白羽冬莉はそんなかんじの儚げな少女だ。そしてとんでもない美少女でもある。前にテレビでいろんな人の顔混ぜて平均作ると超美人になるってやってたけど（実際にそうやって作った顔がどんなだったかは忘れた）、たぶんそれよりも白羽冬莉のほうがきれいだ。内緒だけど、たまにあたしは見とれている。

内緒と言いつつ本人はバレてたり。この間斜め後ろから彼女のこ

とを見ていたらいきなり振り向かれて目が合った。ちなみにそのときはまつ毛に注目していたから、目が合ったときにふりゆふりゆと何か別の生き物みたいに可愛らしくふるえるのがよく見えた。

そのとき白羽冬莉はこう言った。ショートケーキみたいな満面の笑顔で。

「……ようこそ？」

……何が？　ていうかどこに？　何で疑問形？　意味分らないしたった一言なのにツツコミどころが多すぎた。覗き見してたのがバレて恥ずかしかったあたしはソッコー目を逸らして外を見た。たぶん顔は真っ赤だった。

昼休みになると白羽冬莉はいなくなる。みんなお昼ごはんを食べる中、ひとりこつぜんと姿を消す白羽冬莉。お昼ごはんどころかもの食べてるところじたい見たことないし、ぜったいどつかで花の蜜とか吸ってるに違いない。……と信じたわけでもないけど、どこに行ってるんだと気になったあたしは探しに行ってみたことがある。寝てた。外。中庭の花畑の中。

春だったしやたらといい陽気だったし、気持ちには分かった、というかむしろあたしも同じことをしたいくらいだった。ていうか本当に花の蜜かよ、いやちょーちょやミツバチと戯れているだけだ、それってどっちにしても普通じゃなくね？　と我ながら怪しい脳内一人芝居を繰り広げながらあたしはじつとその様子を見た。だってきれいなんだもの。

寝ているのをいいことにあたしは近くに寄ってしゃがみこんだ。スカートから伸びた自分と同じものとは思えないほどきれいな脚とか。花の上に散らばった異様に細くて薄い髪の毛とか。ゆるく握って無造作に投げ出された両手とか。半開きのくちびる。やわらかそうな頬。寝息といっしょに上下するちいさな胸。

思いつきり花の真上に乗っかってるけど、たぶん花は潰れてない。だって白羽冬莉、まるで妖精みたいなんだもの。

と、このときあたしは思った。白羽冬莉は妖精。だけど、証拠が

ない。

ということは、推定妖精だ。

推定妖精少女である白羽冬莉とは、でも、あたしは友だちとかではなかった。なぜだか話しかけてみる勇気が出なくて、遠くで見ただけでいいみたいな気持ちだった。べつに白羽冬莉と仲がいい誰がいて、その子に遠慮してたとかそういうわけでもない。彼女はいつもひとりだった。

ほんとうにいつも、ひとりだった。

そんな白羽冬莉と、今あたしは二人ぼっち。

どころか、何かとてみたいへんなことを言われた気がする。

いまこのひと、一緒に死んでって言ったよね？

どういう意味？ 言葉通り？ ……じゃないよね。妖精語？ 死ぬって妖精語で遊ぼうって言われてるとか。知らないけど。ていうか死ぬとか言うなよ推定妖精の癖に。

あたしはさぞかしお間抜けな顔をしていたに違いない。半分笑ったみたいなの、どうしていいかわからないときの顔だ。

冬莉は本気なのかどうかわからない。というより、本気には見えない。なぜなら彼女は今、ショートケーキみたいな笑顔を浮かべているから。微笑みながら心中を持ちかけるなんて想像できないし。

意味不明。

混乱のせいなのか何なのか、あたしの口から意思とは関係なく声が出た。

「しらはね……ふゆり」

なんで名前なんだよ。意味不明なのはこっちも同じだった。

でも呼ばれた当の本人は、まるでそれが正しい答えだったみたいにとっても嬉しそうな笑顔でうん、と答えてくれた。あたしの胸がむやみにあつたかくなる。きれいな笑顔だ。

「さくらゆかこ」

どきりとする。白羽冬莉の口からあたしの名前。お返しってこと？

あたしはなんだか焦った。

「な……なにしに来たのさ。こんなところに」

ついこつちくんかなみたいなの台詞を口走ってしまふ。別にそんなこと言いたかったわけじゃないのに。

「ゆかここそ、なんでここに来たの？」

彼女は笑ったまま、質問に質問で返す。

なんで、って。

……いやなことが、あつたからだよ。

きゅっと胸が締まった。ぐっと言葉に詰まったあたしを、冬莉は微笑んで見ている。まるで何もかも見透かしてるみたいに。

居心地が悪くて、あたしは視線を逸らした。

「……あたしのことはいいでしょ、別に。先に質問したのはこっちだって」

「ゆかこに会いに」

不思議ちゃんめ。どうしてあたしがここにいて知ってんのよ。
「ゆかこなら、来てくれるって思ってた」

ちなみに呼ばれた覚えはこれっぽっちもない。あたしが今日ここに来たのは完全にあたしの意思で、冬莉と会ったのはただの偶然だし、しかし、一体どう答えたらいいんだ。冬莉が電波なので分からない。冬莉とあたしの周波数だか波長だかは残念ながら、ズレているようだ。

黙っていたら冬莉のほうが続けた。とんでもないことを言う。

「ゆかこ今、死にたいなあって思ってたでしょ？」

「はあ？」

思ってたなかった。……こともないけど。

「じつと下を見て……きゅっと手を握り締めて……少しぼうつとしていて、わたしが来たのも分からないくらいに。あしがちょっと、ふるえてた」

ショートケーキの笑顔がザッハトルテ（生クリーム抜き）になった気がした。

「やなこと、あつたもんね」

血の気が引いた。

なんで知ってたんだ。

あのとき冬莉はいなかった。誰かから聞いたってこともありえない、なぜなら冬莉はいつもひとりだから。
まさか。

いや、そんなはず。だって妖精さんだよ？　ありえない。でも……知らないはずなのに知ってるってことは、つまり。

「やったのは、わたし」

……まじで？

耳を疑うとはこのことだ。でも、そうだ。確かに。冬莉は直前までは、いた。

昨日の体育の時間の後、着替えてるとき、クラスの一人が騒ぎ出した。何かが無くなったって。その子にとってはひどく大切なものらしかったけど、何だったのかは忘れた。どうでもいい。

問題なのは、あたしが濡れ衣を着せられたってことだ。

あたしはそのとき生理痛がひどくて保健室に行ってた。あたしの他に休んでたのは白羽冬莉だけだった。だから自動的に、あたしが犯人ってことになった。

……実際何言われたとかどういう空気になったとかは、ほんと、思い出したくない。ちよつと吐きそう。

冬莉は体育が終わった頃にはもう学校からいなくなってた。それ以前に誰も冬莉がやったなんて疑いもしてなかっただろう。推定妖精がこの世のかたちあるものに興味を持つなんて想像つかない。

でも、さっきの言葉が本当だとすれば、盗みを働いたのは……真犯人は、白羽冬莉。

「……なんでそんなこと、したの」

言いながら、あたしはあれおかしいな、と思っていた。もつと怒ってもいいはずだ。白羽冬莉のせいで気持ち悪くなるくらいいいやな思いましたっていうのに、なんで？

「ゆかこはいま、ここにいます」

「……そうだね」

見りや分かる。それがどうしたっていうのさ。てゆうか質問に答えようよ……。

「わたしが、やったから」

「……そうだね。白羽がやったことで、あたしはいやな思いして、

「ここに来る羽目になった」

あたしがそう言つと、冬莉は本当にうれしそうに、大きくうんと頷いた。

「それが、理由」

「……はあ？」

「いまいちよく分からないけど、つまり、こういうこと？」

白羽冬莉はあたしをこの場所に呼ぶために盗みを働いて、あたしにいやな思いをさせた。

「……うそでしょ？」

「あたしに」会いたかったの？　って聞きかけて、何か恥ずかしくてやめた。「……何か用があったの？」

冬莉は頷く。まだ、ザッハトルテみたいな笑顔。

「だったら普通に呼べばいいじゃん……。なんであんな、……遠まわしなこと」

「テストだったの」

「テスト？」何の？

「わたしと一緒にしてくれるかどうか、っていうテスト。ゆかこは合格」

合格らしい。

「……それはどうも」

この推定妖精少女の言うことにいちいちついていくのは本当にたいへんなんだけど、こういうことですか？

いやな思いをして、ここに来たら合格。推定妖精と心中（……証拠がないから推定心中だけ）する権利がもらえます。……理解できねー。

でも。でもね。

実を言つと、あたしは、結構……

「なんで」

結構、嬉しかったり、していた。

「なんで、あたしなのよ……」

「わたしのこと、見てくれたし」

うわ。そんなこと言われたら。

ハートを突き刺されたみたいなのがした。バレてるって分かってはいたけど、言うタイミングが悪い。

そう、あたしは嬉しかった。冬莉に選んでもらえて、うれしかったんだ。

あたしは冬莉に憧れていたから。

雪見だいふくみたいな肌の、わたあめみたいな声の、ショートケーキあるいはザッハトルテのような笑顔の……ぼわぼわした白羽冬莉に、どこまでも普通人のあたしはとっても憧れていたのだ。

あたしは推定妖精、白羽冬莉みたいになりたかった。

その憧れの推定妖精少女に合格、と言ってもらえて、あたしはすごく嬉しかった。でも。

「ゆかこなら来てくれるって、思ってた」

「そ、そう」

確かにあたしは嬉しかった。けど、それとセットになってる気持ちがあるんだ。

不安。

こんなに普通なあたしを、どうして冬莉は選んだんだろう。何かの違いじゃないの？　そういう気持ちだが、どうしても拭いきれない。

「……あたしで、いいわけ？」

「うん」

「あたしはこんなに普通なのにな？」

名前だって普通だし。佐倉結花子。白羽冬莉に比べたら全然ふつうすぎて泣けるくらい。

冬莉の返事は予想外だった。

「ふつうってなに？」

あたしはすぐに返事できない。

「ふ、ふつうっていうのは」

なぜか必死で、あたしは考えた。

「ふつつつていうのは、……多数派ってことだよ。みんなと一緒にの。マジヨリティーってやつ？」

「今ここには、わたしとゆかこ二人しかいないよ？」

そりゃそうだけど。

「今ごろ多数派は学校で授業受けてるよ。ねむくてつまらない、何の役に立つのか分からない、そんなことのために集まってえんえん時間を潰してる……」

冬莉の吐く毒があたしの体に染み透る。この子ってこんなことも言うんだな……。

「わたしたちは、違う。ふつつじゃない」

そう言うとき冬莉は一步を踏み出した。二歩。三歩。あっという間に距離を詰めてくる。

得体のしれない威圧感を覚えたあたしは、無意識のうちに一步下がろうとして後ろが崖なのを思い出した。

冬莉はもう目の前だ。

「一緒に行こう?」

冬莉の手があたしの手を掴んだ。「んっ……」口から勝手に声が漏れる。異様に冷たい手だった。雪見だいふくだから当然といえば当然なのかも……なんだか繋がった手から冬莉の心臓の鼓動が伝わってくる気が　いや、これはあたしのか?　冷たくて温かい、へんな気もち。

気付けばくちびるが触れそうなほど近くに冬莉の顔があった。あたしの視界は、冬莉だけ。

囁き声が頬をなぜる。

「……わたしと一緒に、死んでくれるよね?」

どきどきし過ぎて目をつむりたくなる。つむった。首がすくむ。冬莉近すぎ。息かかっている。ハーブティみたいにいい匂い。花の香り。繋いだ手だけがおかしなくらい冷たくて、かろうじてあたしの理性を繋ぎ止めてくれている。

あたしもかすれる声で囁いた。

「死ぬ、つてなに。どういう意味」

「そのまんま。……たとえばそこから飛び降りて、二人で一緒にどこか遠いところに行くの」

冬莉が見てた『ここではない、どこか別の世界』は、死後の世界だった……?

まじで?　本当に心中?

「二人でだったら、こわくないよ。なんでかって言うよね」
冬莉はいまどんな顔をしているんだろう。

「ひとりで死ぬひとは、これから自分が向かう未来、死ぬっていうことを真っ直ぐ見てないといけない。だけど二人でいれば、未来じやなくてもうひとりの相手を見ていることができる。死ぬことから目を背けて、一緒にいるひとのことを考えて、いつのまにか死んじ

やえる」

言ってることは、ほとんど分からなかった。

「だからこわくないよ。二人なら」

実際に死ぬのかどうかはともかくとして、冬莉は本気みたいだ。冗談とかではない。冬莉的に本気なのだ。だから聞いた。

「……白羽は、死にたいわけ？」

「ううん。わたしはどこか、違うところに行きたいだけ」

「じゃあなんで死ぬなんていうのさ」

「どこか違うところなんて、このせかいのどこにもないから」

一瞬だけ声色が変わった気がした。苦い薬の味。

「……なんで、違うところに行きたいなんて」

もうとっくに行ってる気がしてたけど。

だけど、冬莉自身は、ぜんぜんまったくそうは思ってたなかったみたいだ。

「ここに、わたしの居場所はないの」

冬莉は 笑っていた。

でもそれはもう、ショートケーキでもザッハトルテでもなかった。何か苦々しい、見ていると切なくなるような……あたしには、例えようがなかった。

「わたしは、変。ゆかこなら分かるでしょう？」

…… 自覚、あったんだね。

「わたしはわたしを変えてせかいのかたちに合わせるか、せかいを変えてわたしかたちに合わせないといけない。でも、どちらも無理。わたしは変すぎた。ここはわたしのいるべきせかいじゃない……」

冬莉はか細い声をすこしだけ震わせながら、切々と、自分の居場所はどこじゃないと訴えた。

それはあたしの中の白羽冬莉像が粉々になった瞬間だった。

彼女は誰にも縛られずにいつもひとり、自由にふわふわな美少女で、よく分からない不思議ちゃんの推定妖精

なんかでは、ぜんぜん、なかったのだ。

白羽冬莉は妖精ではなくて、

あたしと同じ、悩める中二の女の子。でも。

「だから、ゆかこ……」

でもね？

「一緒に、死のうよ」

一緒に死ぬとか。どうなのよ。

あたしは考えた。真面目に考えた。冬莉と一緒になら死ぬるか？

確かに生きてるのはつらい。ちょっとしたことでも昨日まで仲良さげにしてた友だちが、吐きそうになくらい酷い言葉をかけてくる。あたしがクラスの中で一生懸命必死になつて築いて笑っていられたあの場所は、じつはミルフィーユのパイ生地一枚よりも薄くて壊れやすいものだったのかもしれない。それを壊さないように、壊さないように、大切にしながら生きていくのはとてもたいへんで、疲れてストレスで胃に穴が空きそうなこと……って、昨日のことと思うようになった。ふて寝の余波で眠れないベッドの中で、そんな暗いことをぐるぐる考えてた。

死ねばそんな関係ないし、確かに楽になれそうだ。

あたしはそれはもう真面目に考えた。

ふだんまったく使わない頭を酷使した。

そしてようやく、答えを出した。

それを冬莉に伝える。

掴まれた手は相変わらずやたらと冷たくて、なんだか妙に緊張した。告白されるってこんな感じなのか。返事をするっていうのはたいへんなことだ。

でも言わなきゃ。

それが多分、冬莉に対する礼儀というやつだ。

「ごめん」

あたしはゆっくりと、繋いだ手をほどいた。

「……だって、死ぬの、怖いし」

冬莉の笑顔がついに完全に壊れて、デコレート前のスポンジみたいになった。

「……ごめん」

いたたまれなくなってもう一度謝る。

でも、言ったことは本心だ。それはそうだ。どれだけいやなことがあっても、ふて寝したせいで夕ご飯食いつぱぐれても、そのせいで夜眠れなくなって隈ができて、やけ食いのために振り上げた千円札の下ろしどころがなくなってしまうても……怖いものは、やっぱり怖い。冬莉的には二人なら怖くないらしいけど、それはうそだ。二人だろうが百人だろうが怖いに決まってる。だって痛そうだし……。

冬莉は濡れてしぼんだわたあめのような声で言った。

「ゆかこなら分かってくれるって信じてたのに……」

ごめん。今度は心の中だけで、またあたしは謝った。

冬莉は一步、二歩、下がった。少し泣きそうにも見えた。気のせいかもしないけど。

次に彼女が言った言葉は、あたしの心を深く抉った。

「わたしはゆかこみたいになりたかった」

あたしは冬莉みたいになりたかった。

なぜだかとても、泣きたくなった。盗みの犯人扱いされたときにも大して悲しくなかったのに、冬莉のこの一言、たった一言がどうも、あたしの中のデリケートな部分をド真ん中で撃ち抜いたようだった。

でも泣かない。

我慢した。

それはだめだと、あたしの中の何かが強く訴えたから。まばたきもしないであたしは耐えた。唇を強く噛んで。こぶしを強く握って。

冬莉はゆっくりと踵を返すと、去っていった。

あたしは一人になった。

ようやく力が抜けて、目を閉じる。たまっていた涙が一粒こぼれて地面に落ちた。

雨が降ってきた。妙に温かい雨。見上げても雲なんかひとつもない。不思議な雨だ。

それはすぐ、やんだ。

後に残ったのは、澄んできれいなブルースカイ。

次の日、あたしは何とか頑張つて登校した。べつにちゃんと学校行かなきゃとか思ったわけじゃなくて、冬莉のことが気になったからだ。まさか一人で死んでたりしないかなと、不安になったのだ。

冬莉はいつものように机について、半分閉じた目でここではないどこか別の世界、彼女自身がいるべき世界を見つめていた。

あまりにもいつもどおりすぎて拍子抜けしたくらいだ。

あたしは自分の席、冬莉の斜め後ろに座つて、じつと彼女の後ろ姿を見つめた。いつかみたいに振り向いて、笑顔でようこそ？とかなんとか、言うて欲しかったのかもしれない。

でも、どれだけ見つめても……

冬莉は一度も、振り向いてはくれなかった。

お昼頃には明らかに無視されてるんだなって分かって、ちょっと悲しかった。いやちよつとどころじゃない、かなり悲しかった。せっかくのお誘いを（それが心中であるにしても）断っちゃったのだから仕方ないのかもしれない。でも悲しいものは悲しい。

最後の授業が終わる頃、あたしの頭にふと、こんな考えが浮かんだ。

冬莉の中では、あたしは、死んだ人になったのかもしれない。死んだら見えない。視線だつて感じない。だから振り向かない。冬莉の不思議な頭の中身がどうなってるかなんてあたしには分からないけど、それはもしかしたら、冬莉なりの心の守り方なのかもしれない。……あたしが断ったのがショックだったっていうのが、

あたしの自意識過剰でなければだけど。でもたぶん、そんなに間違っていない。

わたしはゆかこみたいになりたかった　あの言葉は、いったいどういう意味だったんだろう。

あたしは自称ふつうの中二女子。冬莉に目をつけられるくらいにはへんらしいけど……。

そんなあたしのどこが、冬莉はいいと思ったのか。
よくわからない。

でも、こう思うのだ。ふつう、あのひとみたいになりたいって思ったら、そのひとと仲良くしたいと思うんじゃないか……って。

冬莉はふつうじゃない。けど、冬莉だってやっぱり悩める中二の女の子だ。あたしと少しくらいは、おんなじところがあつたっておかしい。

あたしは冬莉が好きだ。不思議で自由な女の子。あの子みたいになりたかった。今までは勇気とかそういうのが足りなくて、それに冬莉は遠い存在みたいに思ってたから、ずっと見てるだけでいいと思ってたけど……。

仲良くしたいんだ、本当は。

きっと冬莉も同じだ。

それに、いつもひとりで、しかもこの世界が自分の居場所じゃないとか思っていて……それって、寂しいことじゃないのかなあと思う。

だから……。

あたしは席を立った。そしてときどきする胸を押さえながら、一歩ずつ冬莉のところに歩いていく。

そしてありったけの勇気を振り絞って、名前を呼んだ。

「冬莉」

雪見だいふくみたいなきれいな顔が、ゆっくりとこっちを向く。
そこに浮かんでいる表情がどんなものか、人生で最高に緊張しながら、あたしは待った。

3（後書き）

あとがき。

ここまで読んでくれた方、ありがとうございます。
甘くて苦い、そんなお菓子が食べたいなあ……そんなかんじです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877e/>

推定妖精、白羽冬莉

2010年10月8日15時18分発行